



Kekkaku

結核

▼ 読みたい項目をクリックしてください

Vol. 99 No.5 July-August 2024

- 原著 109……[接触者健診における IGRA 陽性に関連する因子の検討](#) ■戸来依子他
- 短報 115……[Patient Characteristics by Treatment Response and Safety in Amikacin Liposome Inhalation Suspension for Refractory *Mycobacterium avium-intracellulare* Complex Pulmonary Disease](#) ■ Hiroyasu TAKISHIMA et al.
- 119……[What Causes Patient or Doctor Delay on Tuberculosis Diagnosis Before and During COVID-19 Pandemic? — An Eight-Year Study in a Japanese Teaching Hospital](#) ■ Junichi YOSHIDA et al.
- 症例報告 125……[投与方法の変更などによって薬物療法を再開できた肺 *Mycobacterium intracellulare* 症の1例](#) ■尾下豪人他
- 129……[肺非結核性抗酸菌症治療後に *Exophiala dermatitidis* 感染によって咯血をきたした1例 — 当院における検出例の検討](#) ■尾下豪人他
- 133……[多彩な中枢神経結核の病態を呈した粟粒結核の1例](#) ■村瀬享子他
- 139……[癌性腹膜炎との鑑別に苦慮した T-SPOT.TB 陰性の結核性腹膜炎の1例](#) ■森口修平他
- 145……[胸腔ドレナージ後、対側に出現した結核性胸膜炎の1例](#) ■山本光紘他
- 委員会報告 151……[結核療養施設における禁煙支援に関するアンケート調査](#) ■日本結核・非結核性抗酸菌症学会 禁煙推進委員会
- 訂正 155……[日本における結核菌薬剤感受性試験外部制度評価の評価基準に関する解析](#) ■日本結核病学会抗酸菌検査法検討委員会
- 会告 代議員・理事選挙について（お知らせ）

日本結核・非結核性抗酸菌症学会誌

接触者健診における IGRA 陽性に関連する因子の検討

¹戸来 依子 ¹猪狩 英俊 ²岡田 奈生 ²鈴木 公典
¹漆原 崇司 ¹山岸 一貴 ¹矢幅 美鈴

要旨：〔目的〕2021年に低蔓延国になったわが国の接触者健診において、IGRA陽性に関連する因子を調査した。〔方法〕2020年10月から2022年10月に千葉市の結核接触者健診の対象者で、ちば県民保健予防財団にてQFT-Plusを実施した受診者を対象とした。問診と保健所から提供された情報を元にQFT-Plusの陽性率と対象者の背景因子、接触状況の因子、初発結核患者の因子との関連性を評価した。〔結果〕今回の対象者は393人で、QFT-Plus陽性者は33人、陰性者は358人、判定不可2人であった。背景因子の多変量解析では空洞性病変、病変の拡がり3+の存在がQFT-Plus陽性と有意に関連していた。接触時間・頻度と陽性率については、接触時間・状況について問診では明らかにできない受診者が114人(29.0%)にものぼり、279人(71.0%)が解析対象となり、接触時間・頻度で有意差は認めなかった。〔結語〕接触者健診におけるIGRA陽性には、初発患者の空洞性病変、病変の拡がり3+の存在がリスク因子であった。接触時間と頻度については、問診の方法見直しも含めさらなる検討が必要であった。

キーワード：IGRA、接触者健診、空洞性病変、塗抹2+、病変の拡がり3+

————— Short Report —————

PATIENT CHARACTERISTICS BY TREATMENT RESPONSE AND
SAFETY IN AMIKACIN LIPOSOME INHALATION SUSPENSION FOR
REFRACTORY *MYCOBACTERIUM AVIUM-INTRACELLULARE*
COMPLEX PULMONARY DISEASE

¹Hiroyasu TAKISHIMA, ^{1,2}Makoto HAYASHI, ¹Takuya MITSUNARI,
²Saori KAWAMURA, and Satoshi ¹MATSUKURA

Abstract [Background] The safety and efficacy of amikacin liposome inhalation suspension (ALIS) for refractory *Mycobacterium avium-intracellulare* complex lung disease should be verified in practice. [Methods] Retrospective review of 17 treated patients. [Results] During 12 months, 14/17 patients continued on ALIS, with 5 patients achieving sputum conversion. Cavity and impaired forced expiratory in 1 second volume were non-converters' characteristics. [Conclusions] ALIS was safe, and airway involvement may affect efficacy.

Key words: ALIS, Cavitory lesion, Pulmonary function, MAC, Sputum conversion

————— Short Report —————

WHAT CAUSES PATIENT OR DOCTOR DELAY ON TUBERCULOSIS DIAGNOSIS BEFORE AND DURING COVID-19 PANDEMIC?

— An Eight-Year Study in a Japanese Teaching Hospital —

¹Junichi YOSHIDA, ²Kenichiro SHIRAIISHI, ¹Tetsuya KIKUCHI,
³Nobuyuki SHIMONO, and ⁴Kazuhiro YATERA

Abstract [Background] The effects of COVID-19 pandemic on delays in tuberculosis diagnosis remains uncertain. [Methods] The primary endpoints were patient and doctor delays. [Results] In 63 patients, the non-Japanese background alone was significant for patient delay (odds ratio 11.785, 95% confidence interval 1.138–122.025, $P=0.039$). [Conclusions] Before and during COVID-19 pandemic, the non-Japanese patients consistently contributed to patient delay indicating a need for their close surveillance.

Key words: Tuberculosis, Delay, COVID-19 Pandemic, Foreign

COVID-19パンデミック前と期中に何が結核の患者遅延または 医師遅延をもたらしたか — 日本の教育病院における8年間の研究

吉田 順一 白石研一郎 菊池 哲也 下野 信行
矢寺 和博

要旨：〔背景〕 COVID-19パンデミックの結核診断を遅らせる効果は不明である。〔方法〕 主要評価項目は患者遅延と医師遅延とした。〔結果〕 総数63患者で、COVID-19は遅れに影響しなかった。非日本籍の背景因子のみが患者遅延に有意で（オッズ比11.785, 95%信頼区間1.138-122.025, $P=0.039$ ）であった。〔結語〕 COVID-19パンデミック前と期中で、非日本籍は患者遅延に影響し、サーベイランス強化が示唆される。

キーワード：結核, 発見の遅れ, COVID-19パンデミック, 非日本籍

投与方法の変更などによって薬物療法を再開できた 肺 *Mycobacterium intracellulare* 症の 1 例

尾下 豪人 緒方 美里 井上亜沙美 佐野 由佳
吉岡 宏治 池上 靖彦 山岡 直樹

要旨：症例は73歳の女性。5年前に肺 *Mycobacterium intracellulare* 症と診断され、これまで薬物療法を2度開始されるも消化器症状、黄疸のために短期間で中止となっていた。気道破壊性病変が進行し、血痰の悪化を認めたため、アジスロマイシン、エタンプトールを週3日間で再開した。ウルソデオキシコール酸、胃酸分泌抑制剤、制吐剤を併用したところ、治療を継続することができ、症状の改善、排便量の減少がみられた。副作用が軽減したことを確認して連日投与に変更した。肺非結核性抗酸菌（NTM）症に対する治療介入の遅れは難治化や症状の悪化を招く。副作用によって薬物療法が中止となった症例でも投与方法の変更や副作用への対症療法によって再開できることがある。
キーワード：肺非結核性抗酸菌症，多剤併用薬物療法，副作用，間欠療法

肺非結核性抗酸菌症治療後に *Exophiala dermatitidis* 感染によって咯血をきたした1例

— 当院における検出例の検討 —

尾下 豪人 緒方 美里 井上亜沙美 佐野 由佳
吉岡 宏治 池上 靖彦 山岡 直樹

要旨：症例は81歳の女性。19年前から肺 *Mycobacterium avium* 症に対して多剤併用療法が約12年間行われ、終了となっていた。血痰のため再診し、喀痰培養から *Exophiala dermatitidis* が検出された。血痰が持続し、約5カ月後に咯血し、意識障害、呼吸不全を起こして緊急入院した。気管支鏡では右肺中葉からの出血が疑われ、同部の気管支洗浄液から *E. dermatitidis* が検出された。ポリコナゾール (voriconazole: VRCZ) の投与を開始するとともに、気管支動脈塞栓術を施行した。血痰・咯血の再燃はなく、右肺中葉の陰影は縮小した。過去4年間、当院において肺非結核性抗酸菌症の診療中あるいは経過観察中に *E. dermatitidis* が検出された症例は8例あり、抗真菌薬を投与することなく陰性化した症例がある一方、提示例のように咯血を招いた症例もあった。同菌検出時には検出状況や画像所見の推移、症状などから、臨床的意義や抗真菌薬投与の必要性について慎重に判断する必要がある。

キーワード： *Exophiala dermatitidis*, 肺非結核性抗酸菌症, 咯血, 二次感染

多彩な中枢神経結核の病態を呈した粟粒結核の1例

村瀬 享子 花田 豪郎 森口 修平 中濱 洋
宮本 篤 高谷 久史 玉岡 明洋

要旨：59歳女性。発熱，頭痛をきたして受診した。来院時の胸部CTからは多発転移性肺腫瘍，粟粒結核が疑われた。喀痰検査で抗酸菌塗抹陽性，結核菌PCRが陽性であり肺結核の診断となった。入院時より見当識障害がみられて結核性髄膜炎が疑われたため，抗結核薬に加えてステロイドの併用を行った。その後の検査で結核性髄膜炎だけでなく，脳結核腫，脊髄結核腫の合併も認めた。肺結核・粟粒結核の経過は良好であったが，治療途中で脊髄くも膜癒着による両下肢の筋力低下としばりによる歩行困難を認めた。本症例は，初診時より多数の中核結核病変を認めており，経過中に神経症状の悪化を認めたが，抗結核薬とステロイドが奏効して後遺症なく回復した。

キーワード：粟粒結核，脊髄癒着性くも膜炎，結核性髄膜炎，脳・脊髄結核腫

癌性腹膜炎との鑑別に苦慮したT-SPOT.TB陰性の結核性腹膜炎の1例

森口 修平 花田 豪郎 村瀬 享子 中濱 洋
宮本 篤 玉岡 明洋

要旨：癌性腹膜炎との鑑別に苦慮したT-SPOT.TB陰性の結核性腹膜炎について報告する。症例は49歳男性。腹痛を主訴に受診し、胸腹部CTで縦隔リンパ節腫大、びまん性腹膜肥厚、腹水を認め、PET/CTでも同部位への集積を認めた。肺野には肺結核を示唆する粒状影や浸潤影は認めず、T-SPOTが陰性であったため癌性腹膜炎が疑われた。原発巣検索目的で施行した気管支鏡検査では、気管分岐部と右主気管支に白色隆起病変を認め、下部消化管内視鏡検査では回腸末端に潰瘍を認めた。回腸末端の生検検査で抗酸菌塗抹検査が陽性となり、腸管生検検査、腸管洗浄液で*Mycobacterium tuberculosis*が陽性となったため、気管支結核、結核性リンパ節炎、腸結核、結核性腹膜炎と診断した。isoniazid, rifampicin, ethambutol, pyrazinamideで加療を行い、すべての病変は改善した。結核性腹膜炎は診断が難しい疾患であり、本症例のようにT-SPOT陰性であっても同疾患を念頭に診療を行っていくことが重要である。

キーワード：結核、結核性腹膜炎、癌性腹膜炎、T-SPOT

胸腔ドレナージ後，対側に出現した結核性胸膜炎の1例

山本 光紘 加藤 竜平 池内 智行 唐下 泰一
富田 桂公

要旨：50歳代男性。当院受診4カ月前，発熱のため近医受診。右側胸水貯留を認め，総合病院呼吸器外科へ紹介。胸腔ドレーン留置し，抗菌薬投与で胸水は消失した。胸水中結核菌PCR陰性，Interferon-gamma release assay陰性であったがadenosine deaminase (ADA) (146.6 IU/L) 高値でリンパ球優位の滲出性胸水であった。当院受診2日前，発熱，倦怠感，咳嗽のため近医受診。左胸水貯留を認め当院紹介。胸腔ドレーン留置し，抗菌薬投与で改善傾向にあった。胸水はリンパ球優位の滲出性で，抗酸菌PCR陰性であったがADA 85.8 IU/Lと高値であった。結核性胸膜炎を否定できず胸腔鏡下胸膜生検を施行。白色肥厚した壁側胸膜面より得た組織標本にて，結核菌PCR陽性，また，病理所見で乾酪性肉芽腫を認めた。結核性胸膜炎と診断し抗結核薬にて治療開始。その後，胸水再貯留なく経過は良好である。本症例では，右側胸膜炎に対して胸腔ドレナージを行い，約4カ月後に対側の左側に結核性胸膜炎が出現した。移動性胸膜炎の症例は稀であり，機序として左右胸膜間のリンパ流の交通が考えられた。

キーワード：移動性，結核性胸膜炎，ADA，リンパ網，IGRA陰性

結核療養施設における禁煙支援に関するアンケート調査

(2023年10月実施)

日本結核・非結核性抗酸菌症学会 禁煙推進委員会